

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

罨の比較民族学：
極東ロシアの先住民族ウデへの狩猟技術の形成過程
(特集 日本の狩猟・アジアの狩猟)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 史郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005869

畏の比較民族学

極東ロシアの先住民族ウデへの狩猟技術の形成過程

佐々木史郎

▼はじめに

畏は狩猟を行う人々には必須の道具である。直接動物と対峙する槍や弓矢、あるいは鉄砲、ライフルなどによる獵と比べると、受動的であるために、畏獵を弓矢や銃による狩猟よりも一段格下と見られる傾向もないではないが、獲物、設置場所、季節に適した畏の選択には豊富な知識が必要で、適切な場所に設置するだけでも熟練した技術が必要である。

通常、畏の形、設置方法、設置場所、設置時期についての分析は、その畏が使われる自然環境との関係からなされるこ

とが多い。とりわけ生態系との関係で狩猟が語られる場合にはそれが顕著である。しかしシベリア、ロシア極東地域の先住民族の狩猟文化に関しては、従来、伝播主義に基づく歴史民族学的研究か、進化論的な歴史研究が多かったために、ある自然環境を狩猟活動の場とする民族集団の畏についての生態学的研究は、手薄だった。

本章で分析するロシア沿海地方のピキン川（アムール川の主要な支流の一つであるウスリー川にシホテ・アリニ山脈から流れ込む支流）流域のウデへという民族に関する、逆に自然環境との関係から深い分析がなされてきた。一九九五年と九六年に行われた日ロ共同調査で、この地方でも屈指の獵

師と謳われたスサーン・ゲオンカ氏（一九一六—二〇〇三年）に復元してもらった罾類に関して、製作過程と使用状況についての詳しい調査と研究が行われたからである。これらの罾に関しては、比較民族学的な研究の方が立ち遅れた。すなわち、同種あるいは類似の罾類の周辺地域や周辺諸民族、あるいは言語文化的に親縁関係にある諸民族における分布状況やその罾が普及するための社会的、文化的背景などの解明である。さらに、アムール川流域やロシア沿海地方の場合には一八六〇年（北京条約の年）まで中国の直接の支配下にあったことから、普及のための政治的、経済的な背景も探らなくてはならない。本章では一九九五年、九六年に調査したスサーン翁が復元したドゥイ、カファリ、ラギ、ハダナ（以上が重力式罾）、フカ（輪を使った罾）、ニョ・アジリニ（網）、そしてセングミ（自動弓）の七種類の罾について、その分布状況をツングース系諸民族の拡散という文化的な背景とともに、政治的、経済的、そして社会的背景から説明していきたい。これらの罾と同じ、あるいは類似の罾の分布は、種類によってそれぞれ異なる。ドゥイ、カファリ、ハダナはウデへの近隣の諸民族にしか見られないのに対して、ラギやフカ、網や自動弓はシベリア、ロシア極東の広い範囲で様々な民族が使用してきた。また、名称の広がりにも差が見られる。そして、その罾と名称の分布の相違には、言語から復元できる民族の

移動や接触の歴史が反映されているだけでなく、その罾の普及を後押しした政治経済的な背景も関係している。本章ではスサーン翁の罾を、類似のものの分布が限られているものと、広く普及しているものに分類して、各罾の分布範囲とその普及の政治経済的な背景を明らかにしていきたい。なお、各罾の設置方法、構造、使用方法の詳細については、一九九五年と九六年の調査の報告書として出版された『ロシア狩猟文化誌』（佐藤宏之編、慶友社、一九九八年）の田口洋美が執筆したコラムに委ねる。

一▼分布の範囲が限られている罾

①ドゥイ(dui)（写真1、図1）

重力式の罾 (Dead fall trap) の一つであるドゥイは一九九五年、九六年の調査時の主要なインフォーマントになってくれたスサーン・ゲオンカ氏が最も得意とするクロテン用の罾だった。彼はこれを自分の猟場に八十から百ぐらいは仕掛けたという。これは降雪前の晩秋に最も威力を発揮する罾で、小川や窪地の上で橋のように倒れている倒木の上に仕掛ける。クロテンが小川や窪地の中にはいるのを嫌い、橋の上をわたりがる性質を利用したものである。実際に足跡を観察すると、素人目にもクロテンが倒木の上を歩きたがるのははっきり

学の調査をおこなったV(W)・K・アルセーニエフも指摘していた。彼はドイツ語で書いた『東シベリアのロシア人と中国人』という本の中に、このドゥイと全く同じ畛の写真を掲載し、そこに「中国人が仕掛けた畛」というキャプションを入れている。彼が調査した時代には、すでに数多くの中国系の移民がロシア沿海地方に入り込んでいた。彼らはウデへの居住地域にも進出し、そこで交易を行い、一部は農民として住み込み、さらにはクロテンなど換金できる毛皮を求めて狩猟に従事するものもいたようである。

この中国起源のウデへの畛と同じ畛を民族誌で探すと、オロチと松花江のナーナイ(赫哲族)のところで見つかる。ソ連の民族学者V・G・ラリキンはその主著の一つ『オロチ』にいくつか畛類を図解入りで説明しているが、その中にこれと同じ畛が含まれている。オロチはこの畛をドイ^{ドイ}と呼んだ。構造や使用方法はドゥイと全く同じである。また、一九三〇年代に松花江下流域のナーナイ(赫哲族)の調査をおこなった中国の人類学者凌純聲(彼は第二次世界大戦後に台湾に亡命した)は、彼自身の調査ではないが、このドゥイと同じものと思われる畛を『吉林彙徴』から引用しながら紹介している。そこから判断する限り、ウデへ語のドゥイ、オロチ語のドイの語源は中国語の「確」(du)にありそうである。確とは槌子の原理を使って穀物を脱穀する踏み臼のことで、

形状や動物を捕える方法がそれに似ていたことから、そのように命名されたのではないかと想像される。

このように、分布と語源を考え合わせると、このドゥイという畛は中国から松花江流域のナーナイを経てウスリー川支流域のウデへに伝わり、さらに東に進んで日本海に注ぐ河川の流域にいたオロチにまで達したと考えることができる。これらの地域は十九世紀後半から二十世紀前半までの間に中国系の移民の進出が顕著に見られた地域である。我々が調査したビキン川流域にも、かつて数多くの中国人が交易や耕作地を求めて進出しており、いくつもの中国人集落が形成されていた。彼らがそこを去ったのは一九五〇年代末期から始まる中ソ対立のためであり、それまでは地元ウデへやナーナイ達ともかなり親密な関係を保って住み着いていたようである。そのためにもビキン川のウデへたちは中国語の単語をいくつか知っている。

ドゥイがいつビキン川のウデへの間に普及したのかは判らない。しかし、最も蓋然性が高いのは、一九一六年生まれのスサーン翁が本格的にクロテン猟を始めるよりも若干前の時代、すなわち二十世紀初頭か十九世紀末ぐらいである。中国人猟師がこのような畛を持ち込んでいたとすると、遅くとも一八九〇年代にはウデへにも普及していた可能性はある。ちなみにアルセーニエフが写真に収めたのは二十世紀初頭のこと

とと考えられる。

②カファリ(Kafali) (写真2、図2)

カファリも重力式の罾の一つであり、その原理からすると世界中に広く分布するはずの罾であるが、カファリとそれに類する名称の分布はきわめて狭い。すなわち、ウデへとオロチとアムール川本流域のナーナイ、ウリチだけに見られるもので、ツングース系の言語を話す人々の間でもアムールのグループに限られている。ウデへ語ではカファリ(Kafali)であるが、オロチ語、ナーナイ語、ウリチ語ではカパリ(Kapali)となる。それはアムール川流域のツングース系の言語の音韻対応の法則に合致して、アムール川の比較的上流あるいは松花江やウスリー川方面の言語あるは方言の語頭、語中の /k/ は、アムール川の下流の言語や方言では /p/ になるというものである。ウデへ語ビキン方言のカファリがオロチ語やナーナイ語アムール川下流方言やウリチ語でカパリとなるのはこの対応に合致しているわけである。

この罾の基本構造は、重い丸太を下から棒で支えただけの単純なものである。えさで獲物を罾へと誘引する。また罾を見えにくくし、逆にえさを自然にあるように見せるために罾の後ろに小さな小屋のようなものを設置し、木の枝や葉で覆う。ちょっとした茂みに食べ物が引っかかっているように見

せるのである。落下する丸太は獲物に体に対して垂直の方向で打撃を与える。したがって、首や胸など致命傷になりやすい部分に落とすことが大事になる。ウデへの猟師の話では、丸太を支える棒は、かつては二本を上下につなぎ、その間にえさを刺した横棒を挟み込んだという。落とす丸太の重力によって支える棒の方が支えられていた。今は「スタラジョーク」(ロシア語)と呼ばれる特殊な支えを使う。やはり二本の縦棒とえさを刺す横棒からなるが、その組み合わせが少々複雑で、より支えが崩れにくくしてある。しかし、獲物がえさに触ればたちまち支えが崩れて丸太が首や頭や胸に落ちてくる。おそらくそれはヨーロッパからロシア人が持ち込んできた技術ではないかと考えられる。この罾はスタラジョークも含めてニージニエ・ハルビ村で調査したナーナイのカパリと同じであった。

この種の重力式の罾はおそらくロシア極東地方からシベリアにかけて広く分布する古典的なものだと思う。しかし、名称はアムール川流域より南のツングース系の諸民族の間には普及していない。この罾は定住生活を送る人々の間で使われる罾だった。アムール川より南のツングース系の人々は漁撈ぎさうと狩猟に依拠しつつも定住生活をしてきた。彼らはサケ・マスなどの遡河性の魚を大量に捕獲し、それを干魚にして保存して一年を通じて利用することで安定した定住生活を送っ

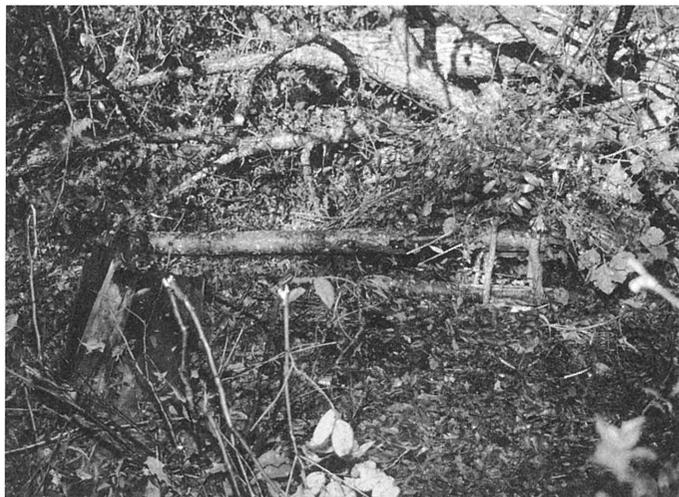


写真2 カファリ (クラスヌイ・ヤールにて1995年)

た。また、菜園を作り、中国や日本と交易して穀類や野菜類も手に入れた。彼らはそれらの食料を保存するために高床式の倉庫を作ったが、それはまた人間と共生するネズミ以外にも、森からクロテンやイタチなどもおびき寄せることになった(倉庫に干魚があったため)。カファリは倉庫の食料をこ



図2 カファリの分布

- 使用が確認されている範囲
- 類似の名称が確認されている範囲

これらの害獣から守るといふ機能を持っていたのである。カファリ／カパリという名称と上記の構造と機能を持つ畏の分布は、このような条件の下に形成されたと考えられる。さらに、丸太を支える仕掛けに近代以降のロシアを通じたヨーロッパの影響が見られることから、スサーン翁が再現してく

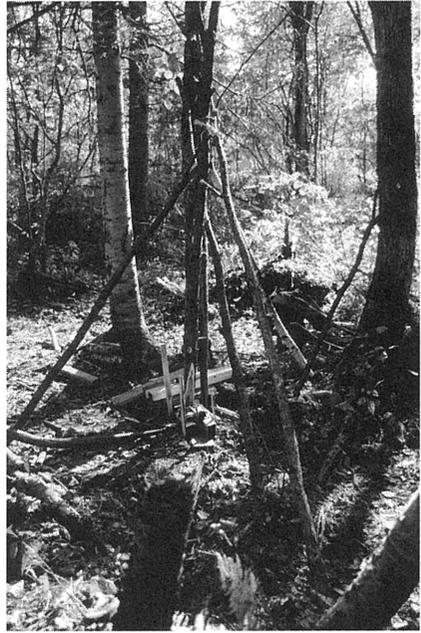


写真3 ハダナ(クラスヌイ・ヤールにて1995年)

れたような姿になったのは、ロシア人との本格的な接触以降(十九世紀末期以降)、あるいはソ連時代になって集団化が実施されてから(一九三〇年代以降)だったかもしれない。

③ ハダナ(hadana) (写真3、図3)

ハダナは棒を獲物の上に垂直に落として仕留める罠で、構造的に特異な罠である。罠は獲物が自らかかるのを待っために、重方式にせよバネ式にせよ、獲物を押さえる部分になるべく広く、長く、大きくして極力逃さないようにする。それに対してこの罠は獲物を狭い通路におびき寄せて、小さな穴から丸太の先端で獲物の頭や首など限られた範囲を確実に突



図3 ハダナの分布

○ 使用が確認されている範囲

いて仕留める。これを再現したスサーン・ゲオンカ翁によれば、この罠は木のうろに逃げ込んだクロテンをおびき寄せて仕留めるのに使われるという。

木のうろにクロテンが逃げ込み、煙で燻いぶしても木の幹をたたいても出てこないときにこの罠を設置する。まず、罠を置

く場所以外の出口になりそうな穴をすべて嚴重にふさぐ。ただ一つ残された出口にクロテンがようやく一匹通れるくらいの狭い通路を木の板を使って設置する。その天井の出口近くにスリットをあける。スリットの位置は通路出口からクロテンの頭一つ分ぐらいのところで、クロテンが出口から鼻先を出したとき首筋に丸太が落ちるようにする。木の枝で三脚を作り、それで落とす丸太が倒れないように支える。丸太の先端はスリットを抜けて落ちるように平らに削る。丸太をスリットの上に持ち上げ、小さな木の棒で作った仕掛けで押さえてセットする。クロテンはうろから出ようと通路を抜けてくるが、その時狭いので前足は後ろに伸ばして蛇のように身体をくねらせて前に進むという。そして鼻先が出口にさしかかると、仕掛けに触れて、丸太が首筋を刺すように落ちてきて仕留められてしまう。

この特殊な罠と同じ構造を持つものは、今のところ松花江流域のナーナイ（赫哲族）のネズミ取り用の罠しか確認されていない。それはこのハダナを小さくしたもので、家の壁などにできた小さな穴から出てくるネズミを全く同じ原理で捕える罠である。ウデへに言語的にも文化的にも最も近いオロチでも確認されていない。ピキン川のウデへも松花江のナーナイもともに強い中国の影響下にあった人々である。ネズミ取りがハダナから生まれたのかハダナが小さなネズミ取りの

応用なのかは断定できないが、この罠もドゥイと同様に中国の影響下に生まれたものであることは確かだろう。

二▼広く普及していたと思われる罠

①ラギ(Lagi) (写真4)

ラギは極東ロシア、シベリアに広く分布し、しかも最も古いタイプの罠である可能性が高い。カファリと同じ重力式の罠であるが、その構造はカファリよりも単純である。腐って中空になった倒木の切り株を木の枝などで覆ってカモフラージュし、切り株の側面に縦長の長方形の穴を開ける。クロテンはそのような倒木の切り株で休むという習性があるという。その穴に重い丸太の端を入れ、穴の底辺に細い棒を立てて丸太を支える。その丸太がいかに自然に切り株に倒れかかっているかのように見せるのがこつである。丸太を支える細い棒にはさらに細い棒がつけられ、そこにえさが置かれる。クロテンが丸太の下の穴から頭をつっこみ、えさにさざると、支えていた細い棒が倒れて丸太がクロテンを押し込め込む仕掛けである。丸太に重みがい足りないときには複数の丸太をそこに立てかけて重さを増強する。前述のようにカファリが集落の周辺や倉庫などに設置され、どちらかといえば倉庫や菜園を荒らす動物に対する防御的な性格を持っているのに対して、



写真4 ラギ（クラスヌイ・ヤールにて1995年）

ラギは森の中の切り株に仕掛けるもので、ドウイなどと同様な攻撃的な罠である。

この罠が最も古いタイプではないかと考えられるのは、その構造が比較的単純であることとともに、言語系統や民族系等を超えて共通に見られることと、ツングース系の諸民族に

ラギに類する名称が広く普及していることが根拠になる。このラギは全く同じものがオロチにも見られるとともに、アムール川流域ではウデヘやオロチ、ナーナイらとは言語系統を異にするニヴフ（アムール川最下流域からサハリンにかけて居住する民族）にも見られるからである（ニヴフ語では「ハ¹⁰haと呼ぶ）。ニヴフ語は日本語、アイヌ語とならぶ西太平洋の島嶼地域、沿岸地域に分布する孤立した言語の一つで、彼らを取り囲むように分布するツングース諸語やアイヌ語とは語彙の借用は見られても、基本的に共通性が見られない。

そして、ウデヘ語が属すツングース諸語には、ラギに類する語彙が広く分布する。エヴェンキ語でラング (lang) またはナング (nang)、エヴェン語ではラング (lang)、ナング (nang)、ナンゴ (nango)、ネギダール語でラング (lang)、オロチ語でラギ (lang)、ウリチ語でナング (nangu)、ウイルタ語でナンブ (nambu)、満洲語でナング (nangu) という語彙が見られる。語頭の /ŋ/ が /n/ と交替するのはツングース諸語にしばしば見られる音韻交替である。また語尾の /ngu/ が /mbu/ に交替する現象もしばしば見られる。つまり、この語彙は基本的にツングース諸語の間で共有されているのである。居住地域にかかわらず共有されているということは少なくともこの語彙がシベリアや極東ロシアに拡散する以前からツングース諸民族に共有されていたことを意味す

る。この語彙が表す罾がすべて同じ構造を持つかどうかは確認されていないが、類似の罾が共有されていた可能性は高い。したがって、この罾はウデへの罾の中でも最も古くから使用されてきた古典的な罾であるといえるだろう。

② フカ (huka) (写真5)

ひもで輪を作りそれに獲物の足や首を引っかけて捕える罾も世界中の狩猟民に知られているが、ツングース系の言語を話す人々の間ではそれはほぼ共通の名称で呼ばれる。フカ (huka) というのはウデへ語でこの輪を意味するが、他のツ



写真5 クロテン用のフカ (クラスヌイ・ヤールにて一九九六年)

ングース系の言語では、エヴェンキ語でフルカ (hurkan)、ウルガ (urga) など、エヴェン語でフルク (Hirk)、ウルク (urk)、オルカ (orka)、ネギダール語でホイカ (hoika)、オロチ語でフッカ (hukka)、ウイルタ語でプタ (puta)、ウリチ語でプシャ (pucha)、ナーナイ語でポイカ (poika)、ホトゥカ (hotka)、フォイカ (foika) など、満洲語でフルガ (hurga) などと呼ばれる。つまり、ラギの場合と同様に、共通の語彙がツングース諸語全体に広まっているわけで、「輪」を意味する語彙はツングース諸語の中でも共通の基礎的な語彙だったといえるだろう。

とはいえ、輪を使った罾にはさまざまな種類があり、仕掛けも異なる。スサーン翁が再現してくれたものには、クロテン用のフカとジャコウジカ用のフカ (首を引っかけて捕えるタイプ) があったが、それぞれ全く異なる構造と仕掛けを持つ。さらに、ウデへの物質文化に造詣の深い民族学者 A・F・スタルツェフによれば、ジャコウジカ用には足を引っかけて宙吊りにするタイプの別の罾もあった (日本や台湾のイノシシ用の罾に類似する)^{*13}。さらに、目を他の民族に転ずると、同じように小川の倒木の上に仕掛けるクロテン用の輪でも、その仕掛けは民族や地域によって異なる。例えば、ビキン川のウデへであるスサーン翁は、仕掛けを固定するのにドウイに用いていた細い棒をキの字形に組み合わせたものを使用し、

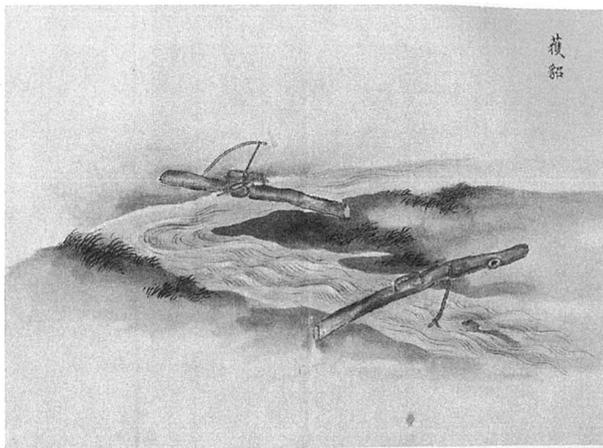
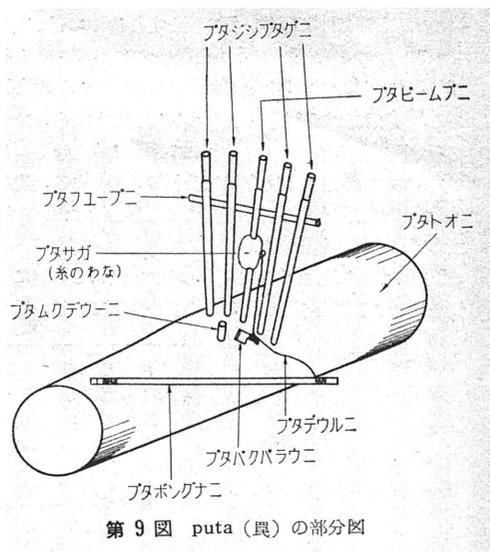


図4 サハリン・アイヌのクロテン用の罟（間宮林蔵口述・村上禎助筆記『北夷分界余話』巻之五、1810年、国立公文書館蔵）

小石を使ってクロテンを川に引きずり込むか、よくしなる枝を使って獲物をはじき上げて宙中りにするような仕掛けを作った。しかし、サハリンのアイヌやウイльта、ニヴフ、あるいは沿海地方のオロチなどは、しなる木の枝を小さな木片で固定し、そのバネを使って獲物を小川の中にはじき落とすような仕掛けを使っていたことが、江戸時代の古い絵画（間宮林蔵口述・村上禎助筆記の『北夷分界余話』や一九三〇年代、



第9図 puta (罟) の部分図

図5 ウイльтаのクロテン用の罟（宮本馨太郎「オロッコ・ギリヤークの衣食住」『民族学研究』第22巻①・②号、1958年、13頁）

四〇年代の調査から知ることができる（図4、図5）。

③ニョ・アジリニ(nyo ajirini) (写真6)

クロテン捕獲用の網のことである。「ニョ」はウデへ語でクロテンを「アジリ」は網を意味し、最後の「ニ」はツングース系の言語に特有の三人称の所有接辞である。これを直訳すれば「クロテンの網」となり、フカ（輪）と同じく普通名詞であって、ドゥイヤカファリ、ラギ、ハダナなど罟特有の名称ではない。したがって、ツングース系の言語の中でもクロ



写真6 ニヨ・アジリニ（クロテン捕獲用の網）（クラスヌイ・ヤールにて1995年）

テンや網を表す語彙が異なれば、名称も異なる。しかし、このクロテン網自体は広い分布を見せ、また、古い時代から使われていたことが知られている。少なくともこの種類のクロテン網の存在はニヴフも含めてアムール川下流域から沿海地方にかけての諸民族に知られ、さらに北方のエヴェンキ、エ

ヴェンなどに知られる。そして、すでに十七世紀末あるいは十八世紀初期に編纂されたと考えられる楊賓の『柳辺紀略』第三巻に、このクロテン網のことが記載されている。木のうろに逃げ込んだ獲物を網を使って捕える方法は遅くとも今から三百年前には確立されていたわけである。

④ セングミ (Sengmi) (写真7、図6)

セングミとはビキン川のウデへ語で小型の自動弓をいう。自動弓も極東ロシア、シベリア全域に広まっている畷である。それどころか、世界中で使われてきた。ただし、シベリア、極東地方でもその形に大きく二つの型がある。一つはアムール・サハリン型とも呼べるもので、弦を押さえる棒が直角に曲がっており、小さな輪を使って弓を支える軸に固定される。獣道を横切るように渡した糸はこの輪につながれ、獣が糸に引っかかると、輪がはずれて矢が発射される。矢の弾道と糸とは平行であるが一致せず、糸は弾道の若干上に張られることになる。それに対してシベリア型とも呼べるものは、弦を押さえる棒がまっすぐ湾曲する程度で、軸に固定するときには先端に小さな棒をつけた糸をつかう。糸の一端は弦を押さえる棒の先端につけられ、他端に小さな棒をつけ、それを弓を支える軸の先端のへこみ部分に固定する。その棒に獣道を横切って張られた糸を結びつける。獲物が糸に引っかかる



写真7 セングミ（自動弓）（クラスヌイ・ヤールにて1996年）

と、軸の先端で固定されていた棒がはずれ、矢が発射される。この型の自動弓では、矢は獣道に張られた糸に沿うように飛ぶ。アムール・サハリン型は文字通りアムール川下流域からサハリンに拡がっており、北海道のアイヌでも使われていた。それに対してシベリア型はシベリアの森林地帯に広く分布し

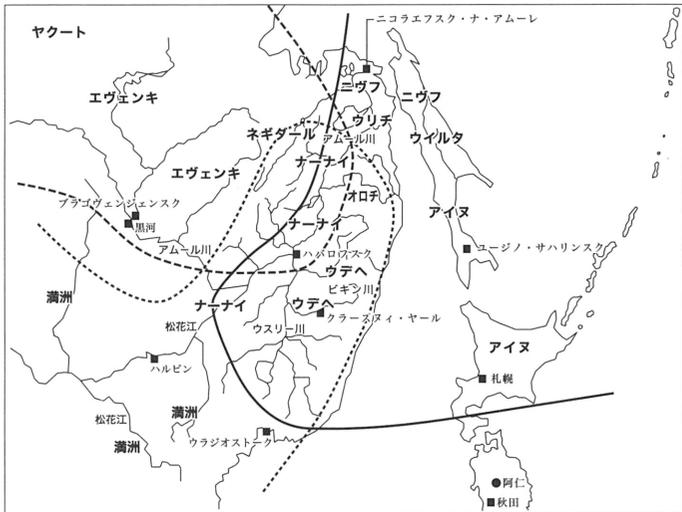


図6 自動弓の分布

-  アムール型自動弓の分布範囲
-  シベリア型自動弓の分布範囲
-  sengmiに類する名称の分布範囲

ており、アムールではナーナイのところで見る事ができる。つまり、ナーナイはこの二つの型の境界にいるわけである。ウデへの自動弓は基本的にアムール・サハリン型である。ウデへには大きさ（実際にはねらう獲物）に応じて三種類の名称がある。大きい順にトゥガ（クマ、イノシシ、ヘラジ

カ、アカシカなどをねらう)、ポウ(カワウソなど)、セングミ(クロテン、イタチ、ウサギなど)と呼ばれる。ウデへはクマやイノシシ、ヘラジカ、アカシカのような大型の肉用の狩猟対象には罾を使わないことが多いが、自動弓はそれら大型獣に使うほど唯一の罾だった。ただ、大きさによって名称を変えていることが確認できるのはウデへとオロチだけで、他のツングース系の諸民族ではそのような分類は知られていない。

最も小型のセングミという名称はアムール川流域のツングース系諸民族に広まっている。例えば、オロチ語でセンミ *semmi*、ネギダール語でセンム *semmu*、ナーナイ語でセル *sermi*、¹⁶ 満洲語でセルミン *selmin* という。同じアムール川下流域でもウリチ語やサハリンのウイルタ語に類似の語彙が見られないところを見ると、ウデへのセングミということばは、満洲語から北上し、ネギダール語まで広がったが、アムール川の最も下流には達しなかったという仮説を立てることができそうである。

▼おわりに——結論に代えて

一九九五年と九六年にササーン・ゲオンカ翁の協力によって集中的に調査し、詳細を記録することができたピキン川流

域のウデへの伝統的といわれる罾の成立過程について、同じツングース系諸民族における類似の罾とその名称の分布の分析から、それぞれの罾が固有の歴史的な背景を持ってピキン川のウデへの間に普及したことが判明した。ドゥイ、カファリ、ハダナ、ラギ、フカ、ニョ・アジリニ、セングミの七種類の罾の中で、最も古い時代からこの地域のウデへ間で使われ、そして名称も知られていたのはラギだろう。この名称は全ツングース系の言語に存在するだけでなく、アムールでは言語系統を異にするニヴフにも知られているからである。輪や自動弓も古い時代から使われていた可能性はある。しかし、ササーン翁が作ったクロテン用のフカの仕掛けはドゥイと同じであり、この仕掛けはドゥイが普及して以降に導入された可能性が高い。自動弓のセングミという名称は満洲との接触で十七世紀以降に入ってきた可能性がある。

分布がアムール川流域やそれ以南の沿海地方や松花江流域に限られているドゥイ、カファリ、ハダナについては比較的新しい時代に普及したと考えられる。ドゥイは十九世紀末に中国人(漢民族)が広めた可能性が高く、ハダナも同様かもしれない。カファリは古いタイプの罾で、その分布を考えるとナーナイからウデへに伝わった罾かもしれない。ただ、丸太を支えるスタラジョークはロシア人が広めたものである。狩猟用具や狩猟技術の伝播・普及過程、あるいは一地域の

ある民族の狩猟用具、技術の形成過程を再構築して、その人々の歴史を探ろうとするとき、その要因として考慮しなければならないのは、民族間の接触・交流の可能性だけでなく、それを促した自然条件や社会的、政治的、経済的な条件も含まれる。とりわけ、中華王朝の支配下にあった歴史が長いアムール川流域やサハリンでは政治的、経済的な要因を重視しなければならぬ。この地域は十三世紀にモンゴルが建てた元王朝が直接支配を初めて以来、明、清と中国の強力な王朝の支配を受けてきた。その結果、その社会や文化は中華文明の一部と化した。その結果、同時に毛皮朝貢を柱とした支配体制に適応するために、猟師にはクロテンなどの毛皮を無傷の状態17で捕獲する技術が求められた。というのは、中国の皇帝は神聖な存在であるために、貢納用の毛皮には経済的な等価性を無視してでも特別質が高いものが要求されたからである。アムール川流域や沿海地方の狩猟民の狩猟技術や用具にはそのような時代背景が強く反映されている。

ラギ、フカの類似語はツングース系諸言語に共通に見られることから、女真、満洲を含むツングース諸語が分岐する以前の共通祖語にもあった可能性が高い。したがって、それらには中国文明の影響は考える必要はないのかもしれない。しかし、他方で一部の言語、一部の民族や地域にしか見られない畷やその名称は、女真、満洲を通じて中国の王朝の支配を

受けるようになってから、その要求や需要に応じて質の高い毛皮を効率よく取るために開発され、普及した畷である可能性が高い。ドゥイ、カファリ、ハダナ、セングミ、独特の仕掛けをつけたフカなどがそれに相当する。ドゥイなどは十九世紀後半に清王朝に代わって帝政ロシアがこの地域の支配者になって以降、中央政府の統制から脱してアムール川下流域や沿海地方に流入してきた漢民族や満洲が広めた可能性すらある。また、カファリの仕掛けであるスタラジョークは、ロシアのアムール、沿海地方領有後、あるいはソ連時代になってから、ロシアの猟師が捕獲効率を上げるためにウデヘやナイに教えたものかもしれない。そして、現在ビキン川のウデへの猟師が使っている鉄製の捕獣器(トラバサミ)は明らかにソ連政府が毛皮生産の効率化と拡大を目的にして、国営企業を通じて普及させた畷である。

ビキン川流域の先住民族ウデへの毛皮獣捕獲用の畷というきわめて限定されたトピック一つをとっても、その成立過程を語るには、様々な要因を考慮に入れなければならない、非常に複雑なものになる。アムール川下流域や沿海地方の先住民族の狩猟文化の成立過程を語るには、このようなトピックをいくつも設定して、一つ一つ丁寧に解きほぐしていかなければならないのである。

注

* 1 帝政ロシアの支配が始まる以前から住み着いてきた諸民族。極東ロシアのアムール川流域、沿海地方、サハリンでは一八六〇年（サハリンでは一八七五年）に正式にロシア領となる以前から住み着いてきた諸民族を指す。

* 2 ウデへはロシア沿海地方に住むツングース系の言語を話した先住民族で、人口は二〇〇二年の時点で一六〇〇人ほどである。ビキン川のグループはかつてはビキンカと呼ばれ、現在はクラスヌィ・ヤールという村に五〇〇人近くが暮らしている。

* 3 例えば、田口洋美「ロシア沿海州少数民族ウデへの狩猟と暮らしー狼猟を中心とした狩猟の技術と毛皮交易の及ぼした影響をめぐって」（佐藤宏之編『ロシア狩猟文化誌』慶友社、一九九八年）、同「ロシア極東アムール川流域と東シベリアにおける先住民族の狩猟漁撈活動」（佐々木史郎編『開かれた系としての狩猟採集社会』国立民族学博物館、二〇〇二年）、同「アムール川流域少数民族の狩猟漁撈活動」（大貫静夫・佐藤宏之編『ロシア極東の民族考古学』六一書房、二〇〇五年）、佐藤宏之『北方狩猟民の民族考古学』（北海道出版企画センター、二〇〇〇年）がある。

* 4 Arsenjew, W. K. *Russen und Chinesen in Ostibirien*. Berlin: A. Scherl, 1926, p.199.

* 5 Дарькин, В. Г. *Орочи. Историко-этнографический очерк с середины XIX в. до наших дней*. Москва: Издательство «Наука» 1964, p. 31.

* 6 凌純聲『黒竜江下游的赫哲族』上海：上海文藝出版社、一九三四年（一九九〇年）、九〇～九一頁

* 7 大貫静夫・佐藤宏之「ウデへの居住形態と領域」（大貫静夫・佐藤宏之編『ロシア極東の民族考古学』六一書房、二〇〇五年）

* 8 Цинцус В. И. *Сравнительный словарь тунгусо-маньчжурских языков* том 1. Ленинград: Издательство «Наука», ленинградское отделение, 1975, p.376.

* 9 凌純聲『黒竜江下游的赫哲族』上海：上海文藝出版社、一九三四年（一九九〇年）、九一～九三頁

* 10 Такамаи, Ч. М. *Нихи: современное хозяйство, культура и быт*. Ленинград: Издательство «Наука», Ленинградское отделение, 1967, p.120.

* 11 Цинцус В. И. *Сравнительный словарь тунгусо-маньчжурских языков* том 1. Ленинград: Издательство «Наука», ленинградское отделение, 1975, pp. 4091-492.

* 12 Цинцус В. И. *Сравнительный словарь тунгусо-маньчжурских языков* том 2. Ленинград: Издательство «Наука», ленинградское отделение, 1977, pp. 352-353.

* 13 A・F・スタルツェフ「ウデへの狩猟活動と狩猟習俗」（佐藤宏之編『ロシア狩猟文化誌』慶友社、一九九八年）、二一〇頁

* 14 間宮林蔵口述・村上禎助筆記『北夷分界余話』卷之五（国立公文書館蔵、一八一〇年）、川村秀彌「邦領樺太オロコ・ギリヤークの狩猟並びに漁撈習俗資料」（『民族学研究』第八巻一号、一九四二年）六九頁、宮本肇太郎「オロコ・ギリヤークの衣食住」（『民族学研究』第二二巻一・二号、一九五八年）一三頁、山本祐弘『樺太自然民族の生活』（相模書房、一九七九年）七九頁

* 15 楊賓『柳辺紀略』（『影印遼海叢書』遼瀋書社、一九八五年）、二五三頁

* 16 Циншиу В. И. *Сравнительный словарь тунгусо-маньчжурских языков* том 2. Ленинград: Издательство «Наука», ленинградское отделение, 1977, pp. 143. 羽田明『満和辞典』（国書刊行会、一九七二年）三六五頁

* 17 佐々木史郎「アイヌとその隣人たちの毛皮獸狩猟—ロシア極東地方先住民族のクロテン用の罾を中心として」（『アジア遊学』Vol.17、勉誠出版、二〇〇〇年）、同「ロシア極東沿海地方の先住民族ウデへの森林資源利用史」（佐々木史郎編『北東アジアにおける森林資源の商業的利用と先住民族』国立民族学博物館、二〇〇六年）、Sasaki, S. Comparative Study of Hunting Techniques of the Native People of the Lower Amur Basin and the Primor'e Region : With Focusing on Traps for Fur Game Animals, *The Ainu and Northern Peoples: with Special Reference to the Subsistence Strategy*, The Proceedings for the 14th International Abashiri Shimposium (2000), Abashiri: The Association for the Promotion of Northern Culture, 2000.